

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

From the results of the panel survey on honorifics  
part 1 : Scores for total politeness level and  
conformity (tekiô)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野元, 菊雄, NOMOTO, Kikuo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001094">https://doi.org/10.15084/00001094</a>

## 敬語のパネル調査から (その1)

——合計段階点と適応点——

野元菊雄

今回のこの報告は「研究報告集5」の「敬語の使い分け点」に続くものである。ともに昭和27～28年度、昭和47年度に実施した敬語調査についての報告である。

この2回の調査では、1回目の調査で被調査者となった人を、2回目も追跡して調査した。これをパネル調査と称する。「研究報告集5」での報告の最後に書いたように、第1回の被調査者434人中、198人(45.6%)が20年後に所在が明らかとなったが、そのうち、185人を調査することができた。このうち5人は、第1回の調査で、ここであげる12の場面についての発話の調査を受けていないので除き、180人について最終的に集計した。

しかし、ここでは、下に述べる12の場面についての反応が2回の調査ともすべて得られた、169人についての結果を報告する。すべてがそろっていないと、下記のように合計するときは意味がなくなるからである。すなわち、180人のうちの11人は、少なくとも第1回か第2回かのどちらかで、12の場面のうちどの1場面かで無答であった者である。

第2回の調査の報告書では、このパネル調査の被調査者については、合計についてだけ結果を示してある。今回はこれを各人ごとに第1回と第2回とを比較してみることにする。

### 合計段階点から

この2回の調査では、いくつかの場面について、このようなとき何と云うかと聞いて、その反応文を丁寧な順に1～3の点を与えた。2回の調査で共通する12の場面について、この丁寧さを示す段階点を合計してみる。段階

点・合計段階点とも数値の高い方が乱暴である。

12の全場面で段階1の12から、全場面で段階3の36点までにこの合計段階点は分布し得る。しかし、実際はもう少し分布域は狭い。

このようにして、各人の合計段階点について、第1回と第2回との相関表を作ると表1のようになる。

表1 合計段階点(全体)

第 1 回

	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	計
						1																1
	1			1																		2
					1	1	1															3
		2				1	2	2														7
			1		2	2	2	1	2	1	1											12
					2	2		3	3		2											12
					2	3	5	4	3	2	2	1										22
	1			1			3	2	3	3	2	3	1									19
第							3	3	5	4	5	5	4			1						30
2							3	3	1	2	8		1	1								19
回							1	2	1	1	2	3	1									11
						1	1	1	2		2		1	1		1						10
					1					1	2	1				1						6
									1		1											2
												1				1	1					3
													1									1
																			1	1	1	3
						1		1		1							1					4
											1											1
																		1				1
計	2	2	1	2	8	12	21	22	24	15	27	13	7	3	3	2	1	1	1	1	1	169

表1から作ったのが図1である。図1は、第1回のある点をとった者が第2回で平均何点であったかを示す破線と、第2回である点をとった者が第1回で何点であったかを示す実線から成っている。ある点をとった者のもう一方の調査の時の平均点とがすべて同じであれば、45°の点線の上に等しく重なるはずである。

第 1 回

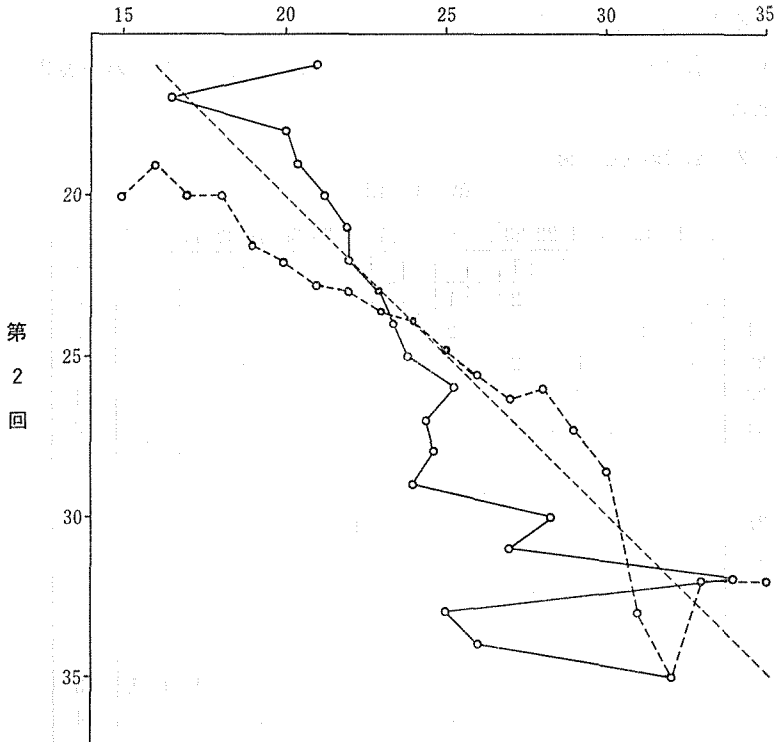


図 1 合計段階点の第 1 回第 2 回相関図

実線も破線も（特に実線は）両端に近い方は、被調査者数の少なさもあって、動きに乱れがある。この両端を除くと、左上の方では実線が点線の上に、破線が点線の下へ、逆に右下の方では破線が点線の上へ、実線が点線の下へ来ていることがわかる。しかし、それぞれ下に来る方が上に来るよりも大きい。

これらは次のように解する。すなわち、第 1 回に丁寧であった者は、第 2 回では少し乱暴になった。第 2 回で丁寧な者は第 1 回では少し乱暴であった。この二つでは前者の方が差が大きい。第 1 回が乱暴であった者は第 2 回では少しく丁寧になったが、しかし、第 2 回が乱暴な者が第 1 回で丁寧であった

方が差が大きい。以上によって、第1回よりも第2回の方が乱暴になった、と言えるようである。

以上は全体について見たのであるが、さらにこれを性別にしたのが表2、3である。

表2 合計段階点 (男)

第 1 回

	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	計	
第 2 回	19					1														1	
	20	1					2	1												4	
	21			1					2											3	
	22				1		2	2	1												6
	23				2	1	1	3	1	2	1										11
	24			2		3	2	3	2	3			1								16
	25				2	1		2	5			1									11
	26						2	1	1	2	2	1									9
	27					1	1		2		1	1		1							7
	28							1	2												3
	29																				
	30									1			1	1							3
	31										1										1
	32																1	1	1		3
	33				1		1		1						1						4
	34																				
	35															1					1
	計	1		1	2	6	6	12	10	19	9	5	3	2	2	1	1	1	1	1	83

これらについて相関係数を計算すると、表1 (全体) では0.6164となり、表2 (男) では0.5545、表3 (女) では0.5207となる。これらは、0.5を超えているので、ある正の相関があると認めることができる。すなわち、20年の間隔を置いて、丁寧さについては大きな差はなかったと言えるであろう。つまり、第1回で乱暴なことばづかいであった者は第2回でもそうであり、第1回で丁寧なことばづかいであった者は第2回でもそうである、という傾向がある、と言ってさしつかえないであろう。

性別では男の方がやや係数は高いが大きな差ではない。

表 3 合計段階点 (女)

第 1 回

	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	計
16							1									1
17	1			1												2
18					1	1	1									3
19		2					1	2	1							6
20					2	2	2	1		1						8
21					1	2		3	3							9
22					2	3	4	4	1	2						16
23	1			1			1	1	2		1	1				8
24						1	3	2	2	2	3	1				14
25							1	2	1		3		1			8
26								1					1			2
27						1	1		1							3
28					1							1			1	3
29									1	1						2
30																
31																
32																
33																
34												1				1
計	2	2		2	7	10	15	16	12	5	8	4	2		1	86

第  
2  
回

表 4 合計段階点の相関係数

		人数	相関係数
年 齢	～49歳	56	0.6845
	50～61歳	57	0.5887
	62歳～	56	0.5434
学 歴	低	112	0.6633
	中	42	0.4727
	高	15	0.4912

年齢別・学歴別については、紙面のつ  
ごう上、相関表は示さないが、人数およ  
び相関係数を表 4 に示す。なお、年齢も  
学歴も 2 回目調査のときのものである。

年齢で見ると、若いほど相関係数が高  
いから、若いほど安定しており、老人ほ  
ど変動したとすることができよう。学歴  
では、低学歴が安定しているようである

が、これは人数とも関係があろう。中学歴と高学歴とはそれほどの差はない。

なお、以上のものについて、平均点と分散とをまとめて表 5 に示す。この

表 5 合計段階点の比較

		人数	第 1 回		第 2 回	
			平均	分数	平均	分数
全 体		169	23.325	10.5272	23.935	12.0964
姓	男	83	24.831	9.9234	25.265	11.6888
	女	86	21.872	6.8092	22.651	9.1341
年 齢	～49歳	56	23.946	12.1221	24.643	11.0153
	50～61歳	57	23.474	8.7054	23.965	12.1391
	62歳～	56	22.554	9.7828	23.446	9.7828
学 歴	低	112	23.563	12.1747	24.313	13.3577
	中	42	22.578	7.8192	23.357	9.8010
	高	15	23.733	3.5289	22.733	5.6622

表5は第2回についての報告書（国立国語研究所報告77「敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較—」）の表8-12に当たるものであるが、数値が一致すべきものでも一致していないのは人数の違いによる。

表5についての有意差は、男女間で両度の調査とも99%の信頼度で、年齢で第1回の49歳以下と62歳以上との間、第2回の学歴で低と高との間がそれぞれ95%の信頼度であるだけである。しかし、年齢については若い方が、学歴については第1回を除いて低い方が乱暴であるという傾向があり、また、高学歴を除いて、すべて第1回より第2回の方が乱暴であるとも言える。

次に表1で斜めに階段状に線を引いたものについて説明をしよう。

この二本の線の間で大部分の者が入っているが、その外に出ているのは、2回の調査での丁寧さの差が大きい者である。線の右上は第1回が乱暴で第2回が丁寧な者、左下は逆に第1回が丁寧で第2回が乱暴だった者である。右上の方は3人だけであり、しかもそれは折れ線に接したところにある。これに対して、左下の方は、この線からかなり離れたところにもあり、かつここに入っている人は11人に及ぶ。この事実からも、第2回の方がことばは乱

暴になった、と言い得る。

14人の丁寧さの大きき違った者は、性別に見ると男6人、女8人で、性ではそれほど差はないと言えよう。丁寧になったのは男二人、女一人であるが、乱暴になったのは男4人、女7人で、女に傾く。女性全体の方が男性より乱暴への移行が大きかったことが示されている表5の反映であろう。

年齢では、62歳以上7人、50～61歳6人、49歳以下一人であって、若い方は比較的安定しているようである。このうち、丁寧になった3人の平均年齢は63.0歳、乱暴になった11人の平均年齢は59.2歳であり差はない。

学歴では、低11人、中3人であって、全体からすると低い方に傾いていると言っているであろう。

使い分け点（「研究報告集5」で述べたので、ここでは説明を省略する）を見ると、全数169人の平均が3段階による使い分け点の旧点で、第1回0.68、第2回1.00と第2回の方が使い分けが上手になっているのに、この14人については、第1回1.07、第2回1.00とかえって点が下がっており、特に乱暴になった11人については、第1回1.09、第2回0.82とその下がり方が大きい。この点からして、使い分け点との関係は大きいものと思われる。

さらに敬語の知識点（これについては国立国語研究所報告77の103ページ以下に説明がある）との間にも関係がありそうである。第1回と第2回との点で、どちらが高いかということで見ると、169人のうち、79人（46.7%）が第1回が高く、64人（37.9%）が第2回が高く、両方が等しかったのが26人（15.4%）であった。この知識点については別の機会にさらに詳しく述べるが、全体の169人について知識点の相関表だけを表6として掲げておく。国立国語研究所報告77の表6-35によれば第1回の平均点は6.525、第2回のそれは5.890であるが、このパネル調査の169人については、第1回6.083、第2回5.692であって、いずれも継続調査の方が高い。これは、パネル調査は若い人が切られているためである。

ともあれ、第1回と第2回との比較では、169人については、上記のような比率であったが、14人については、第1回が高かった者12人（85.8%）、



表 6 知識点 (全体)

第 1 回

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	
第 2 回	0	3	1	4		2	1	1		2	1	3	1	19	
	1														
	2	2			1	1		1	1		1	2		9	
	3				1		2	1		3				7	
	4	7		1		4		5	2	5		3		27	
	5				1	1	1	5				1		9	
	6	4	1	3		4	1	11	3	3	2	5	1	39	
	7	1				2		2				2		7	
	8	2			2	4	1	1	1	6	2	3		24	
	9							2		1				3	
	10			2				3	1	3			1	4	14
	11					1				1		2		4	
	12							1			2	4		7	
計	19	2	10	5	19	6	33	8	24	8	25	3	7	169	

第2回の方が高かった者、同じであった者各一人となっている。明らかに差があると言えるであろう。乱暴になった11人については、一人が第2回の方が高い他は全員が第1回の方が高い。差の平均は、第2回の方が丁寧になった3人は2.3、第1回の方が丁寧であった11人は4.2であって、敬語の知識の低下が乱暴になったことと関係がありそうなことを示している。

その他、14人、特に乱暴になった11人について、169人との比較を示すと次のとおりである。

県外への旅行はやや少ない傾向がある。また、公式会合には、乱暴になった11人は、第1回で全体が、公式会合に出席する方18.9%、普通60.9%、しない方20.3%であるのに対し、それぞれ3人、6人、二人とほぼ等しく、どちらかというやや出席する方に傾いていたのに対し、第2回は無記入一人を除いて順に31.5%、35.7%、32.7%であったのが11人は、一人、4人、6人と著しく出席しない方に傾いている。

同様に、この11人は、宴会や旅行も20年間に嫌いな方に傾いたし、汽車で乗り合わせた知らない人にも、黙っている方に傾き、交際範囲につい

ても、自己判定で、広い方—普通—狭い方の順に169人が第1回、16.6%—63.9%—19.5%が第2回には24.9%—50.3%—24.9%であったのに対して、11人は人数で、第1回が0—6—5、第2回が0—4—7と、やはり狭い方へ傾いて移った。

○以上は対人関係では、引っ込み思案の方に特に第2回で移った、ということと乱暴になったことは関係があると認められよう。

○「小学校に行っているくらいの子どもを育てるのに、小さい時から、自分の顔とかメンツとかをつぶされないように注意しろと教えるのと、自分の顔とかメンツを立てるということにこだわるなど教えるのと、どちらが大切だと思いますか」という質問への答えでは、第2回では169人についてはその68.6%がこだわるなであるのに、乱暴になった11人では一人だけが注意しろと教えるという以外は、すべてがこだわるなど教えるであった。これも差の著しいものである。丁寧になった3人は注意しろと教える方に傾いている。

「あなたは、自分が正しいと思えば、世間のしきたりに反しても、それを押し通すべきだと思いますか、それとも世間のしきたりに従った方が間違いないと思いますか」という問題に対しては、20年間に従うに全体として傾いたが、丁寧になった3人は押し通すに傾いているのに、乱暴になった11人では7人が従う方であり、従うの第1回37.9%、第2回53.8%に比べて差が大きく出ている。

自分の敬語生活についての反省や敬語についての意見に関するものでは次のとおりである。

○「あなたは目上の人と話をする時、うまく敬語が使えますか」という質問に対して、20年間にうまく使えない方に動いたのは、乱暴になった者5人、丁寧になった者一人、うまく使える方に動いたのは、乱暴になった者3人、丁寧になった者二人であった。乱暴になった者で20年前と同じ答えの者3人である。「うまく使える」は高い敬語形式について答えているものと思われるが、そこであるとすれば上の結果は説明のつくものである。

○「昔の敬語の使い方と、今の敬語の使い方とは、どちらがいいと思います

か」の質問では丁寧になった者は今に傾き、乱暴になった者は昔に傾いている。

「お宅では家族の方の間で、敬語を使うことがありますか、それとも家族同士では、敬語を使いませんか」に対して、丁寧になった者は、20年の前も後もすべて「使わない」としている。このことについては説明は困難であるが、乱暴になった方では、20年の間に使わない方に移動した者6人、反対に使う方に移動した者一人で、これは説明がつくが、169人では、使わない方への移動が逆よりもずっと多いことを指摘しておかなければならない。

これと似た問題として「家の中でも、年長の人や目上の人には敬語を使わなければならないでしょうか。それとも家の中では使わなくてもいいでしょうか」と聞いている。いわば当為の問題である。この二つについての表を表7に示す。各マス右下は左が丁寧になった者、右が乱暴になった者である。

表7 家庭中の敬語について ( ) は%

	第1回	第2回
使う	64(37.9) 0-7	14( 8.3) 0-2
使わない	100(59.2) 3-4	130(76.9) 3-7
使うべきだ	79(46.7) 2-5	47(27.8) 2-3
使わなくていい	47(27.8) 0-2	82(48.5) 1-4

上に述べたように乱暴になった者は使わないし、第2回では使わなくてもいいが多くなったのであるが、これは一般的傾向でもあったことになる。

#### 適応点から

この敬語の調査ではなお適応点というものを算出した。これは各場面で、最も多かった段階点と同じ段階点をとったとき1点を与え、全12場面を合計したものである。各場面0点か1点であるから、各人の点は0点から12点の

表 8 適応点 (全体)

第 1 回

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
2		1										1
3							1			1		2
4		1			2	1		2				6
5	2		1		1	1		2		1		8
6			1		3	2	1			1		8
7		1	1			2	3	3	1		1	12
8				1	4	3	9	3	7	5		32
9	1			1	3	3	8	7	11	2		36
10					1	4	6	11	8	5	1	36
11							1	6	6	1	2	16
12						1	2	3	4	1	1	12
計	3	3	3	2	14	15	33	33	41	16	6	169

第 2 回

間に分布する。

この適応点について、上に述べたものと同じように相関表を作ってみた。全体が表 8、男が表 9、女が表 10である。

これらの表及びここには示さなかった表によって、合計段階点の時と同じように計算した結果が表 11である。

表 9 適応点 (男)

第 1 回

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
2		1										1
3							1					1
4		1			1				2			4
5	1		1						2		1	5
6			1		1	1				1		4
7						1	1	1	1		1	5
8					1		4		5	3		13
9					2	1	4	4	6	2		19
10					1	1	1	5	7	3		18
11								3	2	1		6
12						1		3	2	1		7
計	1	2	2		6	5	11	16	27	11	2	83

第 2 回

まず相関係数では、合計段階点より大変低い。マイナスではないから逆相関ではないが、正の相関としてはそう高い方ではない。性では女の方が、年齢では若い方が、学歴では低い方が係数は高くなっている。

平均の方もいろいろのもの間に有意差は見られない。全体では第 2 回がわず

かに点が上がったが、有意差が見られないので結論を述べるには至らないであろう。しかし、性で、第 1 回では男が点が高かったのが、第 2 回には女が高くなったのは注目される。学歴別では第 1 回は学歴が高いほど点が高いという傾向が見られたが、第 2 回にはそれも見られなくなった。

合計段階点の時と同じように、点差が 5 点以上の者を拾うと表 8 の階段状

の線の左下及び右上に入る  
11人が出てきた。このうち、  
左下、すなわち、第1回が  
低くて第2回が高い、適応  
度の上がった者は二人だけ  
で、あとの9人は右上、第  
1回が高くして第2回が低く  
なった者である。

これらのうち、前者の二  
人は適応点は7—12、2—

表 10 適応点 (女)

第 1 回

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
3										1		1
4					1		1					2
5	1				1		1					3
6					2	1	1					4
7		1	1			1	2	2				7
8				1	3	3	5	3	2	2		19
9	1			1	1	2	4	3	5			17
10						3	5	6	1	2	1	18
11							1	3	4		2	10
12							2		2		1	5
計	2	1	1	2	8	10	22	17	14	5	4	86

表 11 適応点相関表からの計算結果

		人数	相関係数	第 1 回		第 2 回	
				平均	分数	平均	分数
全 体		169	0.3811	8.550	4.1765	8.663	4.3774
性	男	83	0.3229	8.843	5.6868	8.554	5.0904
	女	86	0.4111	8.267	4.0564	8.767	3.6669
年 齢	～49歳	56	0.5078	8.536	4.1416	8.714	4.6327
	50～61歳	57	0.3075	8.684	3.6547	8.526	4.4247
	62歳～	56	0.3355	8.429	4.7092	8.750	4.0446
学 歴	低	112	0.4066	8.446	4.6043	8.670	4.7748
	中	42	0.3277	8.619	3.4739	8.524	4.0113
	高	15	0.2234	9.133	2.5156	9.000	2.2667

9であり合計段階を第1回—第2回の順に示すと順にそれぞれ20—24、15—  
23であった。これは第1回では丁寧すぎたため適応点が下がったものであろ  
う。後者の9人中二人は、合計段階点は23—19で第2回の方が丁寧になった  
が、あとは同点の二人を除いて7人すべて第2回の方が乱暴になった、とい  
う形で適応点が下がったものである。9人の平均の合計段階点は24.6—29.7  
であった。このように第2回の適応点の方が低くなっている人が、この11人

の中では圧倒的なのに、全体としては表11で見ると、第2回の方がわずかながら適応点は高くなっている。

なお、合計段階点で差の大きかった14人については、適応点の高かったのが第1回であった者7人、第2回であった者5人、両方が同じであった者二人であって、合計段階点が上がりまたは下がったことによって適応点の高下は両方あり得ることを示しているものと思われる。

次に、合計段階点の2回の調査の差が5点以上の者に対して述べたものと同じことを、適応点の2回の差が5点以上の者について考えてみる。

性別では、適応点が非常に上がった者は男女一人ずつであるが、下がった者9人では女は一人だけであり、この点から言うと性別には大きな差があると言っていい。これは表11からも言えることである。

年齢では、上がった者は男が47歳、女が71歳であって、これはほとんど関係ないと思われる。下がった方では、62歳以上二人、50～61歳4人、49歳以下3人で、合計段階点よりは若い方で安定していない。この9人の平均は51.8歳で、合計段階点に比べて若い。

学歴では上がった者は二人とも低であり、下がった者は、低6人、中二人、高一人で、これは全体の構成比とそう大きな隔たりはない。

適応点の上がった者は二人とも、使い分け点では1—2であるのに対し、適応点の下がった者は使い分け点の上がったのは一人だけで、あとは同点か下がっていて、その平均は0.89—0.33である。適応点はしたがって使い分け点と近い関係にあるのであろう。

知識点は、上がった者二人は一人ずつ第1回が高い者、第2回が高い者であり、これだけでは何とも言えない。下がった者の方では、第1回の知識点の方が高かった者6人、第2回の方が高かった者3人であり、これも関係は特にないようである。

県外旅行では、合計段階点の場合と比べると、それほど少ない方には寄っていない、と言えそうである。そして、公式の会合への出席は合計段階点の場合よりは少し出席する方に寄っている。宴会や旅行は第1回は他の人より

少し好きに寄っていたが、第2回は一般と大きな変わりはなくなった。すなわち20年間にわずかに嫌いな方に相対的に移ったわけで、このあたりにこの20年間に特に適応点の下がった人にはこれがあらわれたのであろう。乗り合わせた相客への話しかけも一般よりも黙っている方に大いに傾いており、これは第1回からそうである。自分で自分を交際の広い方と思うか、狭い方と思うかでは、第1回は一般とそうは変わっていないのに、第2回は適応点の5点以上下がった人は、普通4人、狭い方5人となっていて、大いに狭い方に傾いている。

以上の交際的なものでは、特に下がった人たちは、一般よりは狭い、ないしは20年間に狭くなった、と言えるようである。

前に合計段階点のところでも述べた、子どもの教育に当たって、顔とかメンツを大切にするように教えるかどうかでも、そのときと同じような傾向、つまり、こだわるなの方に傾いている。しかし合計段階点の方では差の出た、世間のしきたりに従うかどうかでは、一般との差はあまり出なかった。

「現代の社会の混乱を救うには、強力な政治家が現れて国民を引っばっていかなければダメだ」という意見に対する賛否では、第1回で賛成44.4%、反対37.9%であったのが、第2回に賛成75.7%、反対15.4%と大幅に賛成に傾いたのが注目されるが、これは第1回のときは「現代の社会の混乱を救うには」ではなくて「日本の復興のためには」であり、またその下も「すぐれた政治家が出てきたら、国民が互いに議論をたたかわせるよりは、その人にまかせた方がいい」という論への賛否であって、多少違っていることも考え合わせるべきではあるが、適応点の差の大きかった計11人では第1回が賛3人否6人、第2回は賛5人否4人と、一般よりは否に傾いていることが注目される。

「先生が何か悪いことをしたというような話を、子供が聞いてきて、親にたずねたとき、親はそれがほんとうであることを知っている場合、子供には、そんなことはないと言った方がよいと思いますか、それはほんとうだ、と言った方がよいと思いますか」という質問で、169人では、そんなことはない

が第1回53.3%，第2回40.2%，本当だと答えるが第1回が29.6%が第2回48.5%と真実を告げる方に傾いたが，適応点の大幅に下がった人は，否定5人，真実を告げる二人から，第2回は，前者0人，後7人とより大きく真実派へ傾いた。これと適応点との関係はよくわからないが，指摘しておく。

目上の人への敬語がうまく使えるか，の質問では，適応点が上がった二人中一人がうまく使える方に動き，他の一人は同じ答えであったのに対し，下がった者9人中，うまく使えない方への移行4人，逆の方向への移行は3人であった。全体の169人では，うまく使える方への移行54人，逆にうまく使えない方への移行51人であった。

これからの敬語は盛んに使うようになった方がいいか，今のままでいいかについては，169人では，第1回が前者28.4%，後者20.1%であったのが，第2回では前者21.3%，後者32.0%となって，使わなくてもいいという考えに移ったようである。この傾向は，20年間に適応点の下がった者は一層著じるしい。すなわち，9人中，第1回は二人が今のままでいいと言っていたのが，第2回は8人もがそう答えている。

表8では，左の上隅に一人あって，これは適応点が第1回3点，第2点2点であり，ともに一番低い。

この人は，合計段階点は第1回32，第2回35で，ともに乱暴である。丁寧さを示す段階点では多くの場面で3であるために適応点が低くなったものである。使い分け点は第1回1，第2回0であり，あまり高いとは言えない。知識点は第1回8，第2回4である。

フェイスシートを見ると男，57歳（中）で低学歴である。

逆に図8で右下の隅で，適応点が2回とも11か12であったのは5人である。これらの人は適応力は高いということになる。合計段階点では，大体25点を中心としていて，両回とも安定している。使い分け点は第1回は5人とも1，第2回は3人が2で二人が1である。知識点は，第1回一第2回の順に並べ



て、8-4, 6-6, 4-0, 6-6, 6-9でありそれほど高いとは言えないようである。

フェイスシートでは男2人, 女3人, 年齢では若一人, 中・老各二人で、学歴は5人とも低である。

おそらく必然の関係はないであろうが、子供を育てるのにお金が大切だと教えることへの賛否で、169人全体では賛61.5%, 否32.5%であるのに、この5人では賛は二人にすぎず、否が3人である。

以上で今回の報告を終わる。次の機会には同じパネル調査について、使い分け点、知識点について取り上げる予定である。